わが人生の転機

心に残る ひと言・人・作品

リレートーク❶

新連載

人は誰も、人生の転機に大切な「出会い」を経験する。岐路における出会いは、恩師、人、家族の激励や叱咤、心に響く言葉であり、本など芸術作品から受けた感動もある。人生に大きな影響を与える出会いは、大きな決断を強いられるトップにとっては、時に価値観を形づくり、方針選択の判断基準となる。各分野のトップの特別な出会いは悩める人々の心に光を当てられる可能性もある。そんな思いから「わが人生の転機」を原則リレートークで連載することにした。第１回は東海学園大学の石川清学長に人生の転機での〝羅針盤〟を聞いた。

ひたむきな兄の姿に感動、医学の道へ。羅針盤は「人生のやりがい」

石川氏は 1947 年名古屋市生まれ。名古屋大学工学部航空学科卒業、大学院に進むも、71 年に中退して同大医学部入学。集中治療を希望し名古屋市立大学麻酔科入局。カナダ・トロント大学留学を経て、名市大助教授。94 年名古屋第二赤十字病院へ移動。同院集中治療部長、副院長などを歴任。2007 年院長就任。18 年院長定年退職後、身を教育界に転じ、19 年愛知医療学院短期大学学長、23 年から現職を務める。

航空工学、医学を学び、医師として活躍した後、教育機関のトップに。３つの転機を経験した異色とも思える半生にどんな出会い、強烈な人生体験があったのだろう。石川氏は「人生のやりがいを求めた結果に過ぎない」と淡々と話す。

石川氏は男３人、女１人の４人兄弟の末っ子。実家は両親が名古屋市内で営む薬局。９歳上の長兄は金沢大学医学部を出て医師に、次兄は家を継ぐため名市大薬学部を経て薬剤師に。３男の石川氏の人生は長兄の影響が強く、長兄から幾つかの「人生のやりがい」を学んでいる。

「ラグビーをやっていた長兄の影響で高校時代からラグビーを始め、大学・社会人合わせて 26 年間現役でした。プレーの面白さだけでなく、ラグビー精神、自己犠牲の精神などラグビーの魅力に取りつかれました。人間はやりがいがあれば、大変なことや嫌なことも耐えられることをラグビーから学び、人生のやりがいを真剣に考えるようになりました」

石川　清
東海学園大学学長

医師になったのも、自分の信念を貫いてひたむきに努力する長兄への憧れがあったためという。

「最初医学部に行かなかったのは、名大病院に見舞いに行った時、玄関に入ると薄暗く、ホルマリンの匂いがして、こんな陰気臭いところで働きたくはないという単純な理由でした。もっと明るい感じの航空科へ。しかし、大学院１年の就職活動中、大企業の歯車の一つになることがやりがいのある仕事とは思えませんでした。その頃、医者になった長兄がやりがいを持って働いている姿を見て感動し、医学部へ入り直す決意をしました」

「長兄は元来、無口で人付き合いが下手な変わり者でした。小児科医となり、最初、教授か